

プレス通知資料（研究成果）



国立大学法人
東京医科歯科大学
TOKYO MEDICAL AND DENTAL UNIVERSITY

報道関係各位

2021年7月1日

国立大学法人東京医科歯科大学

「口底癌と重複癌に関する新知見」 —前方型口底癌の予後不良因子はタバコ関連疾患と重複癌である—

【ポイント】

- 口底癌を前方型と後方型に分類し検討した結果、前方型口底癌は後方型口底癌と比較して全生存率が低く、その原因は重複癌およびタバコ関連疾患であることが明らかとなりました。
- 口底癌、特に前方型口底癌に対しては、禁煙指導と定期的な重複癌のスクリーニングにより治療成績の改善が期待されます。

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科顎口腔外科学分野の原田浩之教授と及川悠特任助教らの研究グループは、同研究科口腔病理学分野の池田通教授との共同研究により、口底癌を前方型と後方型に分類し臨床病理学的な解析を行なった結果、疾患特異的 10 年生存率は前方型口底癌 (92.8%) と後方型口底癌 (95.0%) で差は認められなかったものの、全生存率は前方型口底癌 (65.4%) が後方型口底癌 (95.0%) と比較有意に低い結果となり、その原因が重複癌および心疾患や肺疾患などのタバコ関連疾患であることを示しました。従来、口底癌と喫煙および重複癌の関連が示唆されていましたが、前方型口底癌がより顕著に喫煙の影響を受けるという新たな知見を得ました。この研究成果は、国際科学誌 *Frontiers in Oncology* に、2021 年 6 月 29 日にオンライン版で発表されました。

【研究の背景】

口腔癌の発生頻度は全癌の約 1-2%を占め、その罹患数は年間約 12,000 人と推定され、高齢社会により罹患数は増加傾向にあります。口腔癌全体のうち口底^{※1} 部に発生する癌は約 10%に過ぎず、その発生率の低さからこれまで口底癌に関する報告は限られていました。その中で、口腔癌、特に口底癌は喫煙や重複癌^{※2} との関連が示唆されていましたが、重複癌に罹患しやすいタイプの口底癌や予後不良因子など、治療成績向上につながる臨床病理学的な特徴については不明のままでした。

【研究成果の概要】

過去 15 年間で加療した口腔癌 1220 例のうち、口底癌は 62 例でした。口底の解剖学的な特徴から、前方型口底癌 32 例と後方型口底癌 30 例の 2 群に分類して解析を行いました。その結果、患者背景として前方型口底癌は男性の割合(96.9%)が高く、喫煙量については、プリンクマン指数^{※3} 換算で、前方型が 920、後方型が 500 と前方型が有意に高いことが分かりました。また、臨床病理学的な特徴として、前方型口底癌は頸部リンパ節転移様相が進行していることと、重複癌の割合が高いことが明らかとなりました。前方型口底癌の半数以上(32 例中 17 例)が重複癌に罹患しているという結果であり、極めて発生率が高いことが分かりました。発生部位は咽頭・喉頭や上部消化管(食道、胃など)が多く、重複癌に関する多変量解析の結果、前方型口底癌が独立した危険因子として抽出されました。



図 1 前方型口底癌(左)と後方型口底癌(右)

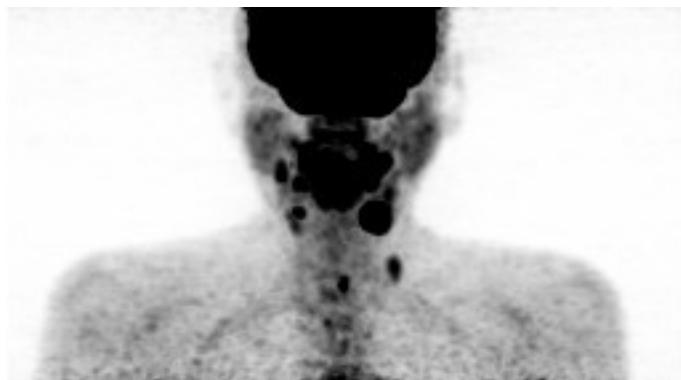


図 2 前方型口底癌と両側頸部リンパ節転移および下咽頭癌

生存率を比較すると、疾患特異的生存率^{※3}は前方型口底癌が92.8%、後方型口底癌が95.0%でした。一方、全生存率^{※4}を比較すると、前方型口底癌が65.4%、後方型口底癌が95.0%と前方型口底癌の生存率が有意に低い結果となりました。さらに前方型口底癌の死因を検証すると、重複癌および循環器疾患や肺疾患などのタバコ関連疾患であることが分かりました。

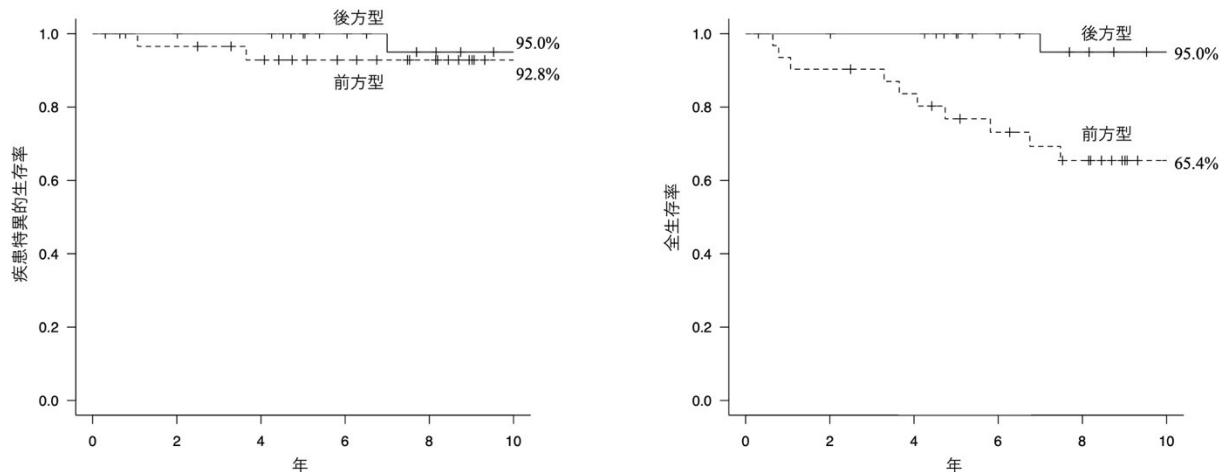


図3 疾患特異的生存率(左)と全生存率(右)

【研究成果の意義】

前方型口底癌が重複癌およびタバコ関連疾患と関連することが新たに分かりました。治療成績向上のためには、循環器疾患や肺疾患を含むタバコ関連疾患の予防のため、早期の禁煙指導が重要です。また、重複癌は他臓器に発生するため、口腔領域のみならず、消化管内視鏡検査や PET/CT などの検査を定期的に実施することで、他癌の早期発見・早期治療が可能となり、治療成績の向上につながると考えられます。

【用語解説】

※1 口底：舌と下顎に囲まれた馬蹄形の口腔亜部位。口腔は舌、上顎歯肉、下顎歯肉、口底、頬粘膜、硬口蓋の亜部位から成る。

※2 重複癌：複数の臓器や器官に同時性または異時性に発生した原発性の癌。

※3 ブリンクマン指数：喫煙と疾患のリスクを数値で表す方法。「1日平均喫煙本数 × 喫煙年数」で計算される。一般的に400を超えると肺がんのリスクが高まり、600以上は肺がん高度危険群と言われている。

※4 疾患特異的生存率：特定疾患で死亡していない人々の割合。本研究における特定疾患とは口底癌のこと。

※5 全生存率：死亡していない人々の全体の割合。

【論文情報】

掲載誌:Frontiers in Oncology

論文タイトル:Comparison of clinicopathological characteristics between the anterior and posterior type of squamous cell carcinoma of the floor of the mouth: the anterior type is a risk factor for multiple primary cancer

【研究者プロフィール】

原田 浩之 (ハラダ ヒロユキ) Harada Hiroyuki

東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科

顎口腔外科学分野 教授

・研究領域

口腔外科学、口腔腫瘍学



及川 悠 (オイカワ ユウ) Oikawa Yu

東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科

顎口腔外科学分野 特任助教

・研究領域

口腔外科学、口腔腫瘍学



【問い合わせ先】

＜研究に関するご質問＞

東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科

顎口腔外科学分野 原田 浩之 (ハラダ ヒロユキ)

TEL:03-5803-5506 FAX:03-5803-0199

E-mail: hiro-harada.osur@tmd.ac.jp

＜報道に関するご質問＞

東京医科歯科大学 総務部総務秘書課広報係

〒113-8510 東京都文京区湯島 1-5-45

TEL:03-5803-5833 FAX:03-5803-0272

E-mail: kouhou.adm@tmd.ac.jp